

● 論題の背景

< § 1 「夜へ急ぐ人」は昔の話 >

私事で恐縮ですが、第2回・第3回のディベート甲子園に高校生として出場した私も、3年前から社会人になりましたが、昨年比較的働く時間が自由な仕事に転職しました。サラリーマン時代は夕方5時に帰宅していましたが、今では日付が変わる時間近くまで仕事をすることもあります（この解説文もその後の時間帯に書いていたりします）。

そんな夜は、短時間で夕食を済ませようと思えば、24時間営業のコンビニエンスストアで弁当が買えるので便利です。自分で料理をしようと思ったら、食材は駅前の24時間営業のスーパーマーケットで買えてしまいます。薬だって、24時間営業のドラッグストアで買えます。ひとり暮らしの私にとっては実に便利です。ついつい、遅い時間まで働いてしまいます。店の照明で深夜の街も明るく、都市部で暮らしていると「真っ暗になる前に急いで帰らなきゃ！」という意識もなくなります。

< § 2 「深夜に買った」は生活を変えた >

こんなに便利な深夜営業ですが、30年ほど前には、ほとんど行われていませんでした。営業時間に関する規制が緩和されて以来、消費者のニーズに合わせて、次々と普及していったのです。それにともない、社会の活動時間が増え、深夜労働が増え、子どもの活動時間も夜型にシフトしていきました。

2006年の厚生労働白書（p198）では、こうした長時間サービスを求める消費者のスタイルの変化が、長時間労働を生む一因であることが指摘されており、見直しが必要であると指摘しています。

人間という生物は、本来、夜になったら眠るものなのです。この30年あまりで、世の中が不自然な方向に変わってしまった、ということなのかもしれません。

< § 3 「深夜営業当たり前」は独善的？ >

今では当たりの深夜営業ですが、そうでない国も多くあります。例えば、ドイツには「閉店法」と呼ばれる法律があり、月曜から土曜は午後8時から翌朝6時まで、日曜・祝日は終日、お店を開店してはいけない、という規制が存在していました（ただし、ガソリンスタンドなどの例外規定があります）。

昨年から州ごとに、この規制が緩和されてきていますが、つい最近まで「夜はお店が閉まっているのが当たり前」という国も、現実存在していたのです。

< § 4 小売店とは…付帯文について① >

「付帯文： ここでいう小売店とは、商品に消費者に売る有人の店舗とする。ただし、飲食店、ガソリンスタンドは除く。」

小売店とは、商品をお店ではなく直接、消費者に売るお店のことです。詳しくは、総務省統計局が出している『日本標準産業分類』の中の「大分類J—卸売業・小売業」の項の小売業の欄を見てください。有人の店舗ですから、自動販売機は含まれません。

その場で飲食させる店舗は、小売店ではなく飲食店にあたります（「日本標準産業分類」中分類57の解説より）。持ち帰らせると小売店になるということです。ただし、ガソリンスタンドも小売店ですが、この論題では除外しました。

< § 5 深夜営業とは…付帯文について② >

「付帯文： 深夜営業とは、午後10時から午前5時までの販売・配送とする。」

深夜営業には、いろいろな考え方・定義がありますが、この論題では、労働基準法37条で割増賃金を支払うことと標準規定されている午後10時から午前5時までとします。

また、営業とは、販売だけでなく配送も含まれますので、例えば宅配ピザなどのデリバリーサービス店も小売店に含まれます。

●予想される議論

< § 6 メリットの一例 >

・店舗の労働時間が短縮される

深夜に営業している小売店で働く人だけでなく、それに合わせて商品を生産・運搬している人も、夜遅い時間まで働いています。こういった仕事の労働時間が、短縮されます。

・生活習慣が改善される

午後10時以降閉店しますから、それに合わせて仕事を切り上げようとするようになります。また、早く寝るように生活が変わることが期待されます。

・強盗などの危険性が低くなる

夜中、人が少ない時間帯によく行われるコンビニ強盗などの被害が減るだけでなく、実は、店員自身が商品を盗む「内引き」による被害の減少にもつながります。

・青少年の「たまり場」が減る

深夜に営業している店舗は、青少年のたまり場になり、犯罪の温床になるとして問題視されています。それがなくなることになり、犯罪減少などの効果が期待されます。

・エネルギー消費が減る

真夜中でも看板や店内照明が非常に明るく点灯していますが、これが消えることになりますので、電力などのエネルギーの消費を減らすことになります。

< § 7 デメリットの一例 >

・店舗の売上が減る

深夜の時間帯は営業することができないので、その時間帯分の売上が単に減るだけでなく、「いつでも開いていて便利だ」というお店のイメージも下がります。

・生活が不便になる

深夜に商品を買えなくなるだけでなく、最近では銀行のATMサービスや宅配便、公共料金の支払いができる店舗も増えており、それができなくなるので不便になります。

・強盗などの危険性が高くなる

ずっと開店しているよりも、夜の閉店作業や朝の開店作業をしているときが一番強盗に狙われやすいということから、強盗などの危険性が高まります。

・深夜の駆け込み場所がなくなる

全国のコンビニエンスストアでは、深夜の女性や子どもの駆け込みが半年に5000件以上あるそうです。深夜、身の危険を感じた時の駆け込み場所が、なくなります。

・雇用が減る

深夜に営業するお店が減るということは、その店舗で働く人だけでなく、それに合わせて商品を生産・運搬する人も減ることになり、雇用が減ってしまいます。

< § 8 「表裏一体」と「温故知新」 >

—そもそも夜は寝るべきという、人間の生物としての本来の生活スタイルと、夜でもいろいろ買える生活スタイルはどちらがいいのか。—深夜明るい店舗をずっと営業し続けることは、防犯にとって効果があるのか、むしろ逆効果になるのか。

—無理のある労働が多い状態と、労働の機会自体が減る状態は、どちらが問題なのか。

これらは表裏一体の問題だといえます。質疑や第一反駁でこの点を指摘して強調することも必要になるでしょう。

便利な生活に慣れきった頭で考えてしまうと、第二反駁でメリットやデメリットを比較する基準は見つけにくいと思います。これまでの常識にとらわれず、新聞・雑誌の記事やインターネットを駆使して資料を探し、どの点を日本の社会として優先するべきか、決めた上で、立論を作成してください。

肯定側の議論を作るには、30年以上前の状況を想像して考えることも必要です。周りの大人に話を聞いてみるといいでしょう。

逆に否定側の議論は、日々進化している最新のサービスなどを常に追いかけて、実際に利用している人の意見・感想を聞いてみるといいでしょう。くれぐれも、深夜の時間帯までかけることなく、日々計画的に準備を進めてください。

●参考文献

・『日本からコンビニがなくなる日!』高久永道著 (2002/06) 榊ベストブック発行

・月刊『コンビニ』商業界発行

・総務省統計局「日本標準産業分類」HP

<http://www.stat.go.jp/index/seido/sangyo>